

らしい世界觀に立脚して、新しい世界の建設に進む私達の心に強い共鳴を與へて、この一篇を讀破させねばおかないのではあるまいか。「歐米列國の日本進出」(第四章第二節)の一節は國史から不愉快な事實をすべて消し去つてしまはうと思つて居る人々からは非難されるであらうが、事實に忠實に書かれた此の章から、他の東洋民族の停滞性、獨善性とは本質的に異つた日本民族の優秀性、その性格の裡に、光輝ある國史が形成されて行つた事をしみじみと感じ、あの幕末の重大時局に當つて、皇國を守られた時代の先覺者達に對し、感謝の念一層深きものがあるのは私一人ではあるまい。

然し、不遜な妄評をした弱輩の私に、更に一つの不遜が許されるならば、現勢篇は、「世界地理」を始めとして相次いで所謂「地誌」類が續々と發表されて居る時なので、それ等と重複する様な形式をとるよりは、海軍有終會のもつ有力な力を以つてして、その道の専門家、大家をわずらはし、その豊富なる専門的知識を活用し、太平洋の現實の姿の上に打建てられるべき所の、太平洋のあるべき姿への具體的な研究の一端を發表して頂きたかつた。よしその事が私見にとゞまり、専門事項に關する限りの事であつても、必ずや更に深い研究への刺激となつた事であらう。そして尙迷夢からさめきらない地理學に「無言の威壓」を加へて頂く事が出來たであらうと信じるのである。

私のこの不遜な一文が、私自身の無智淺學を攻撃される手段となる事は少しも差支へないが、本書の價値を傷けるやうな事がな

いやうにと祈つて居る。(菊判一、一八六頁、地圖十葉、挿入寫眞十八葉、發賣所丸善株式會社、定價十一圓)(川上喜代四)

日本考古學論攷

梅原末治著

本書は先きに世に出た『支那考古學論攷』と姉妹編をなすものであつて、著者梅原博士の日本考古學に關する論攷中主要なるもの廿二編に對し、字句の修正の外、新たに補記追記等を加へて一冊に纏めたものである。而して例言に見る如く、最後の二編を除いた外は著者が廿餘年の永きに互る故濱田博士指導下になされたものであり、本書が世に出た意味を右の恩師に對する著者の感謝の言葉の中に味ふことが出来る。

さて右の廿二編の論攷は之を對象の上から大別すると、金石文に關するもの、我が金石併用期の特種遺物たる銅鐸、銅劍、銅鉞等の諸考察、上代古墳に關するもの三部になるが、なほ他に「上代土器に關する一考察」「國分寺に關聯する二二の所見等特種な問題に對する著者の實物に即した見解を録した諸編をも含んでゐる。

先づ金石文に關するものは、『行基舍利瓶記に見えたるその姓氏と享年に就いて』、『小野毛人墳墓とその墓誌』、『山城に於ける宇治宿禰とその墓誌』等の諸編であつて、其の企圖に係る『墓誌を藏した古墓の研究』の一部を成して居り大正四年から六年に互る著者の若き日の述作である。最初墓誌の文獻的考證に興味を持た

れ乍ら、而も補記に見える「從來墓誌が單なる金石文の資料たるにとゞまつたに對し、遺品が實年代を明示する處から、それをば出土の遺跡と結びつけて、そこに上代墓制の沿革を考へる一つの據所を見出さう」とされた處に早く著者の考古學者としての立場を窺ひ得るのである。「聖德太子の御廟」なる考證は、或る特定な古墳の記述ではあるが、右の意味から注意すべきものがある。次に第二の主要な對象に就いては大正七年五月偶然發見の大和吐田郷から銅鐸と銅鏡とが伴出した事實が著者の考古學的研究を刺戟したに發してゐる。銅鐸に關する本野收録の論致は、右の吐田郷發見品の記載考察の他に「銅鐸に就いて」、「再び銅鐸に就いて」、「淡路出土の一遺品を記して銅鐸の形式分類に及び」、「銅鐸の化學成分に就いて」の五編を數へる。銅鐸に關する著者の綜括的研究は別に昭和二年に『銅鐸の研究』として、資料編一部二冊が公刊されてゐるが、考證篇が未刊である爲に、如上の諸篇は著者の此の種遺品に對する考察の發展を辿り得る外に、その性質觀を窺ふ可き重要な文獻をなすものである。著者の銅鐸説は形式觀にあつては、分布の示す事實乃至化學成分の上から、小形厚手より大形薄手のものへの推移を考へてこれを三類五種に分ち、これが祖形の編鐘にある可きを説き、また鏡や銅鉾、銅劍と聯關せしめて其の實年代を想定し引いて日本人の製作にかゝれるものと斷じて、從來その異民族の手になり、また使用の時期が我が高塚の營まれたよりも遙か前の世であると考へられてゐたに對し、先史時代の日常土器の問題や、後の古墳の性質觀からするより廣い見地からそ

の然らざるを明にしたものであつて、是等の立論は全く考古學に立脚してゐる。右の著者の銅鐸説は次の銅劍銅鉾のそれ等と共に、何れも大正末年に物されたものであるが著者自身の言にも見える如く、今日では學界の通説となつてゐるので、讀む者をしてそれ等が公にせられた當時以後の學界の發展をせざる回顧せしめるのである。銅劍・銅鉾考は上記の銅鐸研究と聯關するものである。その「銅劍・銅鉾に就いて」なる論文は前後實に一四〇頁に互る長編であつて、大正十二年一月から十三年十月にかけて本誌に連載され、それは故高橋博士の『銅鐸銅劍の研究』と並び稱す可く、而も一層廣い見地から獨り該遺物自體の型式學的な研究にとゞまらず、それに聯關した遺物例へば鏡、彌生式土器、一般銅器類、鐵器類、玉器類についてそれ／＼に吟味を加へ、更に是等を出す遺跡たる魏椁、竊式椁等の墓制を論せられて居り、且つ銅鐸の場合と同様朝鮮半島の知見を以てして、此の後者に於いて大陸よりした高度な文化のこれ等の地方の享受の面を把握しようとしてゐるのは特筆せらる可きである。次に多紐細紋鏡に到つても著者は大和吐田郷發見以後たへず資料の新出土に注意し、爾後得た所から、半島發見の其の鏡范乃至遺品より、うちに、我が古墳出土鏡に見ると相似た仿製鏡の存在を指摘して、問題を新しい方面に展開した。第三の主題に至つては一般古鏡を藏する古墳墓の考究があつて、これは大正の末年著者に依つて獨自な考察を見たものであるが、當初その銅鏡の示す年代を以つて、古墳墓の年代を律せんとした著者が、歴史家の提言を聽いて其後實物の再檢討から

鏡の傳生を考へ、その見解を更新した處の終末の「上代古墳出土の古鏡に就いて」なる一編が先づ擧げらる可きである。同様古墳墓研究中注意すべきは外形の研究にとゞまらず、内部構造に注意が向けられた事であつて、之亦著者の實物に即した考古學的態度の結果のあらはれに他ならない。而もこれに就いても大正十四年發表の「上代墳墓の營造に關する一考察」と終末に載せた「本邦上代高塚の内部構造に就いて」とを比較するならば、たえず注意を實物の示す所に向け、自家の前言にこだはる事なく歩一歩新しい見解を加へられる態度が、あざやかに浮び出てゐる。古墳に關する自餘の諸編は著者自ら云ふ如く、かゝるより進んだ見解への階梯を示すものとして讀者の關心を喚ぶであらう。なほ如上の諸見解は云はゞ綜括とも見る可きものとして、「上代の遺物遺跡と其の文化」があつて便利である。

右の弊見で知らるゝ如く本書は著者が先人の學を受けて自ら修築しつゝある日本原史時代の考古學書であり、而もそれは發展形に於いて示されてゐる。先きに出た『支那考古學論攷』を知る吾人は今本書を手にして、過去の著者が歩まれた考古學の道を窺ひ得ると共に、その補記を通じて將來をも推知し得る感がせられる。本書の例言に「此の書を編して、自らの十數年其の歩みの遅々たる事を省み、またそれが一つの型をとつてゐると云ふ右の現實に對して、故(濱田)先生が晩年筆者に望まれた新たな分野の開拓に就いて思ひを深くせざるを得ないのである」と謙虚にも述べて居られるが、しかし右の著者の學問の行き方、たゆまざる努力か

らすれば、永遠にその分野に行き詰りはないであらう。

(本文七六四頁、圖版八八葉、弘文堂發行、定價十四圓)(藤岡謙二郎)

諸葛孔明

宮川 尚 志著

諸葛孔明といへば、東洋史を習つたけれども忘れてしまつたと稱する人でもその名を憶えてゐるほど有名であるが、しかしいつたい何をした人か、どういふ人か、となると、精確なことはこの時代の歴史を專攻してゐる人でなければ、もうあやしいのである。著者宮川氏はこの時代の研究に眞摯な努力を續けてをられる學徒である。私達はその諸葛孔明傳を安心して聽けるだけでなく、大きな收穫を期待し得る筈である。少くとも私は本書から養分を吸収しようとする期待して讀み、決して裏切られることはなかつたのである。

本書はどういふ態度で書かれてゐるか。序によると、「あくまで孔明の傳記を書くことに終始し、彼の生涯の各時期と彼の環境である當時の社會との關聯において生起してきたる事件を説明しながら彼の肉的生活の動きをも窺ひ知らうと庶幾」されたのであり、簡潔に言へば、「孔明の人となりを再現」することが目的である。

これは勿論歴史的人物の傳記を書く正しい態度であらう。かゝる意圖から、孔明の生涯を彼の環境、時代との關聯に於て、

第一期 前半生 二十七歳の時まで

第二期 壯年時代 それ以後四十二歳まで